

大塚敬節
矢數道明
責任編集

世近漢方醫學書集成

13

後藤艮山
山脇東洋

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 第Ⅰ期・全30卷

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 13

後藤艮山
山脇東洋

第Ⅰ期
全30卷

昭和五十四年十月二十三日 第一刷発行
昭和六十年十一月二十五日 第二刷発行

編者 大塚 敬節

発行者 中村 安孝

発行者 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八)五二七〇番代
振替口座 東京七一三三六番

製版所 日本写真製版所

印刷所 伊藤印刷

製本所 株式会社 辻本製本



子約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

ISBN4-626-01206-X C3347

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫



後藤艮山肖像



山脇東洋肖像

凡 例

一、本書第十三卷には、『師説筆記』『艮山先生医説』『遺教』『養浩堂方矩』『艮山後藤先生往復書簡』（後藤艮山）、『養寿院医則』『東洋洛語』『藏志』（山脇東洋）を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、版本の場合、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。但し、写本の場合はその限りではない。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

師説筆記 大塚敬節所蔵写本 一冊

艮山先生医説 大塚敬節所蔵写本 一冊（師説筆記他と合一冊）

遺教 宗田一氏所蔵写本 一冊（内題には「艮山先生遺教解」とある）

養浩堂方矩 宗田一氏所蔵写本 一冊

艮山後藤先生往復書簡 大塚敬節所蔵写本 一冊（師節筆記と合一冊）

養寿院医則 版本 一冊（大塚敬節所蔵）

東洋洛語 大塚敬節所蔵写本 一冊

蔵志 版本（宝暦九年版）二卷二冊（財研医会・財医学文化館所蔵）

一、解説は、大塚恭男（日本東洋医学会理事）が執筆した。

一、巻頭の口絵は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』（昭和十一年、刀江書院）によった。

後藤 艮 山

大 塚 恭 男

生涯のあらまし

後藤艮山（一六五九—一七三三）は、古方派と呼ばれる江戸中期に興った医学革新運動の先駆者であった。ただし、古方派という呼称は彼の門人である香川修庵や山脇東洋らの代になって初めて自覚をもって使われたのであって、艮山自身には革新の鼻祖というような大形おおぎような構えはまったくめられない。

古方派についてかんたんに説明すると、これは十六世紀に田代三喜、曲直瀬道三らによって我が国に導入された中国の金・元時代の医学、とりわけ李杲、朱震亨らの体系に対する批判として

興った学派である。金元医学は陰陽五行など中国自然哲学の潤色を濃厚に受けており、とりわけ、特定の薬物が特定の経絡に選択的な親和性をもっているとする引経方便などの考えは、実証主義的な思考の持主には受け容れ難いものであった。

おりから金元医学の理論的支柱となった朱子らの宋学に対する批判として、伊藤仁齋らが「孔孟の原典に帰る」運動を興していた。これが古学派であるが、あたかも、これに呼応するかの如くに医学の上でも思弁主義的な金元医学を排して「張仲景の原典に帰る」ことが主唱されたのであり、その最初の人物は名古屋玄医（一六二八—一六九六）である。古来、多くの革新運動は復古を名として行なわれたが、日本の古方派も実証的な張仲景の精神に帰ることを名として、実は必ずしも張仲景にとらわれない新しい医学の確立をめざしたのであった。最初的主唱者が名古屋玄医であることは前述した通りだが、実は玄医の業績にはなお金元医学の色彩が色濃く残っているものであつて、事実上の創始者の名に価するのはここに述べる後藤艮山である。

後藤艮山、名は達、字は有成、俗称左一郎、また養庵とも号した。曾祖父後藤光有は豊臣秀吉に仕えたが、病を得て丹州小野中村に退居して貧困の生活を送り、のちに京都に移つて藤中と改姓している。祖父は正次といい、老いてより宗貞を称したが、仕官せず簡素な生活のうちに世を終った。父は光長で、老いて定理と称し、また黙翁と号した。光長は若い頃に江戸に移り、梅原氏の亀と結婚して、万治二年（一六五九）七月二十三日に常盤橋辺の僑居で艮山を生んだ。艮山

は幼時より聡明で、少年の頃より学問を好み、林祭酒のもとで経学を学び、さらに牧村卜壽に医学を学んだが、この頃すでに従前行なわれていた医学に対する疑惑の念が生じていたという。孝心が人一倍厚く、よく両親につかえたが、この頃、江戸には火災が頻発して、光長の家は十一年間に七回も火災にあうという始末で、家財を悉く失ってしまった。一度志をたてて江戸に出てきた光長も、このうへは京都で質素に余世をおくりたいといひだしたので、良山は父母を伴って京都に移り、相国寺西の室町に居を定めた。貞享二年（一六八五）のことである。

一生の計をたてねばならぬ年令となつた良山は、儒者となつても伊藤仁斎以上になることは難しい、僧となつても隠元をぬきんでることは難しいと嘆じたすえに医学の道を選んだという。

良山が名古屋玄医の門をたたいて、束脩の少ないのを理由に入門を断われ、捨てぜりふを残して去り、以後苦学独立してついに一家をなしたという話は原南陽の『叢桂亭医事小言』などに記されていて大変有名だが、さまざまな文章より推測される良山の人柄からみて、このような話が実際におこつたとは信じ難い。

良山が強烈な個性と強固な意志の持主であつたことは十分に推測される。しかし、その反面、広い包容力と謙虚な心をもっていて、決して不要な抗争を好まず、内剛外柔の性格の人であつたと思うのである。その証拠はおいおい示すこととするが、たとえば良山の古稀の祝いが京都東山の客樓で行なわれた時、彼の筆頭弟子と目される香川修庵は「寿養庵後藤先生七十序」と題する

文章を草し、その中で次のようなことを言っている。すなわち修庵が艮山の徳を称えたのに答えて、艮山は喜びを顔にあらわしながら静かに「天下には三樂があるといわれています。一つは天の授けるところで人力の及ぶものではありません。いま一つは有徳者のことで私はとうていそれにはあたりません。ただ天下の英才を得て教育するものとしての楽しみなら見込みがあるかもしれません」と言ったというのである。

浅田宗伯の『皇国名医伝』後藤艮山の条には、前述の名古屋玄医にかかわる逸話を載せているが、これは宗伯の見識を示すものであろう。

いずれにしても、艮山が医学については殆ど師らしい師はもたずに、苦学力行して一家をなしたことはまちがいない。

貞享二年に京都相国寺西の室町に居を定めた時、艮山は二十七歳になっていた。

この年、名を養達と改め医師として開業し、傍ら佐藤孺人に儒学を学んだ。その後、住居を狩野街に移して、旧姓にもどり、後藤養庵と号した。この頃より次第に医名が高くなり、人の出入りも多くなったので禁門前の正親町に家一区を求めて、ここを終生の居とした。元禄十五年（一七〇二）には父光長が没した。これに先立ち、元禄四年（一六九一）に加茂就久の娘總と結婚し、省、省、直、督の四男とほかに三女を得た。このうち省は字を身之、通称仲介、椿庵と号して、よく父業を発展させ、さらに省の子の敏、字求之は慕庵、あるいは五牛道人と号して大いに医名

をあげ、祖父良山、父椿庵の業を顕彰した。

良山は享保十八年（一七三三）六月に江州伊吹山に登ったが、その旅行中に膈噎にかかり、九月十八日に没した。享年七十五歳。千本蓮台寺中普門院に葬られた。その墓には次のような香川修庵の墓銘が刻まれている。「粹哉医乎。基自純誠。距邪倡正。斯道始明。天縱卓見。世伝駿声。灸起千癆。膽解百醒。誠泉尤詳。選葉維精。深造食養。用常權衡。至孝無違。喪祭盡敬。五十而慕。復見先生。濟々龍門。教育群英。錫万人命。司四方盟。永鑄蒼眠。不朽之名」がそれである。良山の門人は二〇〇人を超えた。中でも、京都の香川修庵、山脇東洋、大阪の市瀬穆、伊勢の山村重高、備前の赤澤貞幹らは有名である。

良山の医業、医論については後述するが、医師の社会的地位の確立に関連して特記せねばならないことがある。それは従来の医師が概ね髪を剃り、僧衣を着け、僧官を受けていたのに抵抗して、良山は髪を束ね、平服を着用したことであつた。良山以前では向井元升（一六〇九—一六七七）にこの挙があつたといわれるが、この時は世の注目を惹くには至らなかつた。しかし、良山の場合は影響するところがきわめて大きく、彼の門人ばかりでなく一般医師も彼にならない、形の上でも医業が仏教から独立していく原動力となつたのである。

艮山の医論

前章で述べたように艮山は古方派の祖とされる人であるが、彼の場合は必ずしも張仲景方のみを金科玉条としたわけではなかった。艮山が土佐の一医生に与えたという次の言葉が、彼の医学に対する姿勢を端的に示している。

「凡そ医を知らんと欲する者は先ず庖羲の義皇に起こり、稊穀の神農に出ずることを察し、法を素靈八十一難の正語に取り、その空論雜說文義の通じ難きものを捨て、漢唐の張機、葛洪、巢元方、孫思邈、王燾らの書を涉獵し、宋明諸家の陰陽旺相、府藏分配区々の弁に惑わず、百病は一氣の留滞に生ずることを識らば則ち思い半ばに過ぎん」というものがこれで、これによると、艮山は『素問』、『靈樞』、『難經』のうちの正語をとり、張機すなわち張仲景以下漢より唐に至る多くの著名医家の書を涉獵せよと述べているのであつて、張仲景はいわば凡百のうちの一人に過ぎない。

しかし、後半においては、宋明諸家の陰陽旺相、府藏分配区々の説に惑わされてはならぬと説き、これは古方派医師のすべてに共通する中心的命題となつたのである。

そして末尾の「百病は一氣の留滞に生ずることを識らば則ち思い半ばに過ぎん」の章句は、艮

山独自の医論である一氣留滯説の表白にほかならない。

一氣留滯説は、吉益東洞の万病一毒説とともに日本人の手になつた病因論として日本医学史上に不滅の光を放っている。一氣留滯説を理解するには、まず氣の意義を知らねばならない。氣は大宇宙である自然界や小宇宙である人体を充たし、有形の万物を生ぜしめ、変化させ、やがて無形に歸せしめるものであり、また形をして機能ある形たらしめるものである。こういうと難しく聞こえるが、氣の概念は我々が無意識に日常語として使用しているのであつて、これら多くの日常語を反芻すれば、氣の意義を理解するのはさほど困難ではない。「天氣が悪い」、「氣を失う」、「氣が若い」、「やる氣が無い」、「氣の抜けたビール」などである。しかし、氣はまた現象としての空氣でもあり、我々が呼吸しているのも氣である。そして氣は血とともに人体を循環して諸器官にそれぞれの機能を営ましめ、全体を生命ある有機体として統一しているのである。中国の古典『淮南子』は、「形は生の舍なり、氣は生の充なり、神は生の制なり」と述べているが、これによると、氣は主として身体的活動に、そして神が精神的活動に関係するものと思われる。もっとも氣・神の二者は不可分の存在であつて、これら二者の作用を合わせて氣に歸せしめることが多く、従つて、「病は氣から」の語の如くに、氣には多分に精神的因子が含まれていることも知らねばならない。「氣違い(狂)」などは、精神そのものを氣が代弁した例であらう。

さて、当時もつとも普通に行なわれていた病因論は南宋淳熙間(一一七四—一一八九)に陳言

によつて著わされた『三因極一病源論』の説く三因説であつた。陳言によると病因には外所因、内所因、不内外因の三種がある。外所因とは寒暑燥湿風熱のいわゆる六淫であり、内所因とは喜怒哀憂思悲恐驚のいわゆる七情である。また不内外因とは飲食饑飽、叫呼傷氣、盡神度量、疲極筋力、陰陽違逆、虎狼毒虫、金瘡踠折、疰忤附着畏壓溺など常理に反したような生活態度のしからしめるものである。これに対して良山は『師説筆記』の中で次のように言っている。「凡病ノ生ズル風、寒、湿ニヨレバ其氣滯リ、飲食ニヨルモ滯ナリ。七情ニヨルモ滯也。皆元氣ノ鬱滯スルヨリ成ル也。故其ササユルモノハ大概如此チガヘドモ、其相手ニナリ滯トコロハ一元氣ナリ。」これは三因方と一氣留滯説との関連を述べたものであるが、このように起因はさまざまでも、それにより氣の鬱滯がおこつてはじめて病氣がおこる、という考えである。同じ寒氣にあたつてもある者は病氣になり、ある者はならない、という現象は一氣留滯説によつて初めて説明し得る。つまり、氣を生体の側の防禦機轉の因子としてとらえ、発病の決定的因子をこれにおいたのであつて、きわめて斬新な発想として評価したいと思う。

臨床医としての良山

一氣留滯説の堤唱者後藤良山は、同時に卓越した臨床医でもあつた。彼の医療の特色としては、

(一)食餌療法の重視 (二)灸、熊胆、蕃椒、温泉、瀑布泉の重視 (三)順氣剤の重視 (四)民間療法の積極的な運用、などをあげることができる。

『師説筆記』には、「然バ藥ハ毒物ニシテ外邪アルトキノ備タルコト知ベシ。真元虚脱、肌膚血肉枯悴シタル者、何ゾ異味ノ毒草ヲ以テ、コレヲ補益スルコト有ンヤ。然ルニ宋元以来ノ医家者流コノ事ヲ不知シテ、虚ヲ補ト云テ虚冷ノ人ニ服藥バカリヲ用テ、天性自然ノ大補タル肉味餌食ヲ却テツヨキニ過ルナドトテ禁ゼリ。カナシキノ甚キコト也。故ニ今虚冷ノ人ニハ肉味ヲ食ハシメテ、其補益ヲトル、世医却テ此ヲ妄ナリトス。誤レル哉。コレモ後世ノ医、各医ヲ産業トス故、利ヲネガフノ心ソコニアリテ、ヤクニタタヌコトバヲ以テ説ヲ飾リ、タダ服藥ヲツトメテ命ヲ殞スノ罪ヲ不知、謝ヲ求ムルニ志ツヨキ故ニ、妄ニ数十貼ノ藥ヲ与ヘテ、其ノ謝ノ重カラニコトヲネガフ。コレ其産業トスル処ヨリ覺ヘズカク也モテユキケルノ弊ナリ」と記されている。また、「凡傷寒ナド外邪ニハ藥ヲ第一ニ服セシメ、餌食ナドハセズ……………是故ニ内傷ノ病ニタダ藥ヲ用テ、餌食ヲ用ヒザレバ大ニ誤也……………故ニ吾門、内傷ノ諸病ニハ餌食ヲ專ニ主トシテ、方劑ハ不用コトナリ」とも述べている。

これによると、感染症など外因性の疾患には藥物療法を以てし、諸種内因性の疾患には食餌療法を以てするというのが艮山の治療の鉄則であったようである。

艮山が灸、熊胆、温泉を賞用したことは『師説筆記』その他にみえ、当時もすでに有名であつ